
アイ・ラブ・ユー

むむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイ・ラブ・ユー

【Nコード】

N8339U

【作者名】

むむ

【あらすじ】

僕は生涯、沙樹だけを愛し続けた。

中学3年の冬。

沙樹は、卒業式当日。車に跳ねられ、死んだ。

僕はそれから4人の女性と交際を結び、愛し続けた。

僕はこの生涯、沙樹だけを愛した。

「約束する。僕はこの生涯、君以外を好きにならない。僕は君のものだ」

中学2年生の春。僕は沙樹と約束した。

「本当？絶対ね、約束よ」

こちらまで心が暖かくなるような、笑顔だった。

「うん、絶対。絶対の約束」

僕達は、小さな小さな夜の桜咲く公園で静かに指切りを交わした。

中学3年の冬。

彼女は、卒業式当日。車に跳ねられ、死んだ。

僕はそれから4人の女性と交際を結び、愛し続けた。

一人目は、高校1年生の時に知り合った。

同じクラスに所属していた彼女は、三上梓と言った。

梓はスポーツが万能で、明るくクラスの中でも人気者だった。

「ねえ、君は私のことが好きなの？」

学校祭の準備期間、梓と二人だけが残って作業をしていたときに彼女がふと聞いてきた。

「ああ、好きだよ」

僕は答えた。

「どうして？」

彼女が聞いた。

「好きだからさ」

「ふーん…」

疑心に満ちた瞳をしていたので、僕は彼女を抱きしめた。

「ちょ…ちよつと…っ」

狼狽え、抵抗する彼女を無視してその肩に顔をうずめる。

「もう…っ」

彼女の手は僕の背中へと回った。

次の日、梓は首を吊って死んでいた。

二人目は、大学2年生の時に出会った。

同じゼミに所属していた彼女は、林奈月と言った。

奈月は大人しいが、はっきりものを言う性格だった。

「僕、君のことが好きなんだけど」

朝、たまたま早く学校に来て偶然会った彼女に僕は言った。

「…そんなこと言って、他に好きな人がいるんじゃないの？」

彼女は疑心に満ちた目で言った。

「いいや、君以外に好きな人はいないよ」

僕はそう言って奈月を抱きしめ、その唇に自らの唇を重ねた。

「君は僕のことを好きじゃないの？」

僕は聞いた。

「…好き」

頬を赤らめて彼女が言った。

そんな彼女が可愛くて、僕はさらに唇を重ねた。

次の日、奈月は首を吊って死んでいた。

三人目は、社会人になったその年に出会った。

たまたま同僚の合コンに呼ばれ、参加した。彼女は、一いつきにのまえいつき）と言った。

いつきは、気が強く我が侘だった。

合コンが終わり、他のメンバーが解散した時に僕だけがいつきに呼ばれた。

「ねえ、これからホテルへ行かない？」

僕は彼女とホテルへ行った。

「本当に私とやって良いの？」

白いベッドの上で、いつきが僕に聞いた。

「君となら、大歓迎さ」

僕は彼女の首筋に唇を這わせながらそう言った。

「…そう」

彼女はそれきり会話をしなかったので、僕は思う存分愛しい彼女をベッドの上で愛した。

次の日、いつきは首を吊って死んでいた。

「お前、一度でも関わった女は死ぬらしいじゃん」

どこからか噂を聞きつけ、高校生の時からの同級生がそう言った。

「案外、沙樹ちゃんの呪いだったたりしてな」

彼は冗談っぽくそう言って、僕の肩を叩いた。

「まあ、気にするなよ。ただ偶然が重なっただけさ」

偶然でないことを僕は知っていた。

四人目は、30歳の時に出会った。

仕事は順調だった。周りがどんどん結婚していく中でも僕は、仕事ばかりしていた。ただし、休日は図書館へ行って本を読む生活をしていて。そこで、彼女と出会った。

歳は中学生ぐらい。受験を控えているのだろうか、いつも僕の右前の席で勉強をしていた。彼女は、棚橋涼と言った。

たまたま彼女の鉛筆が僕の元へ転がり込んできたのをきっかけに、僕は涼と話をするようになった。

彼女は大人しく、自虐的で暗い性格だった。だが、心を許した僕に対してはよく笑顔を見せてくれる素直な子だった。

しばらくの間は無言で一緒にいて、たまにわからない問題があると涼は僕に聞いてきた。

時には一緒に考え、時には答え、時には雑談ばかりで問題を解かずにいてしまったこともあった。

僕は一人暮らしだという話を聞いて、涼が言った。

「行ってみたいです」

なので僕は彼女を家に招いた。

物珍しそうに僕の部屋を見て、ベッドに腰掛けた彼女を僕は押し倒した。

彼女はしばらく黙って僕の行為を受け入れていたが、突然体の位置が入れ替わり僕が彼女の下になった。

彼女の両手は、僕の首に当てられていて僕は呼吸が出来なくなる。

「…どうして？」

ぽたり、と滴が僕の頬へと落ちてきた。

「どうして、こんなことするの…?」

彼女の手は震えていて、とても悲しそうだった。

「君が、好きだから」

僕は彼女の頬に手を当ててそう言った。

「…私を、好きでいてくれるって…私だけを好きでいてくれるって

…そう言ったじゃないっ。なのに、どうして君はいつもいつも私を裏切るの？」

僕の首を絞める力がより一層強くなる。

「…好き…さ」

僕は、苦しみながらそれでも言葉を紡いだ。

「沙樹…」

僕の呼んだ名前に、彼女はビクリと震え首を絞める力が弱まった。

「だから、僕は君だけを愛し続けたよ。涼…いいや、沙樹。僕が生涯愛しているのは、君だけなんだから」

僕が初めて告白したのも、キスをしたのも、最後までやったのも全て沙樹。

涼は…沙樹は、泣いた。その涙は、先ほどのものとは違った。

それから僕は彼女とずっと一緒にいる。

ただし、まだ彼女が受験生で…しかも中学生なのだから、したいことも堂々と出来ないのはすごくもどかしい気持ちにはなる。

たまに我慢できずにいても、彼女は快く許してくれる。

僕は生涯、沙樹だけを愛した。

十年経っても、二十年経っても、ずっとずっと。

(後書き)

切ないらぶ・すとりーを目標して。

…何か、歪んでいるような。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8339u/>

アイ・ラブ・ユー

2011年7月13日03時27分発行